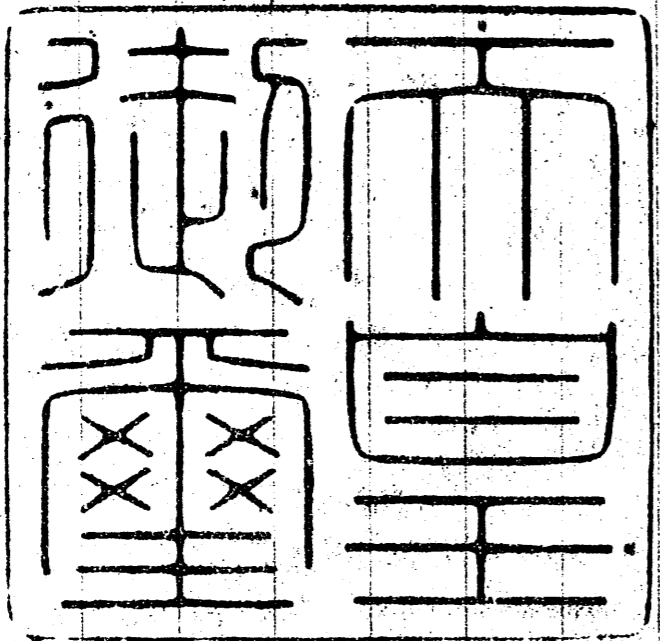


勅令第二百二十一號

朕南洋群島所得稅令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ
公布セシム

裕仁

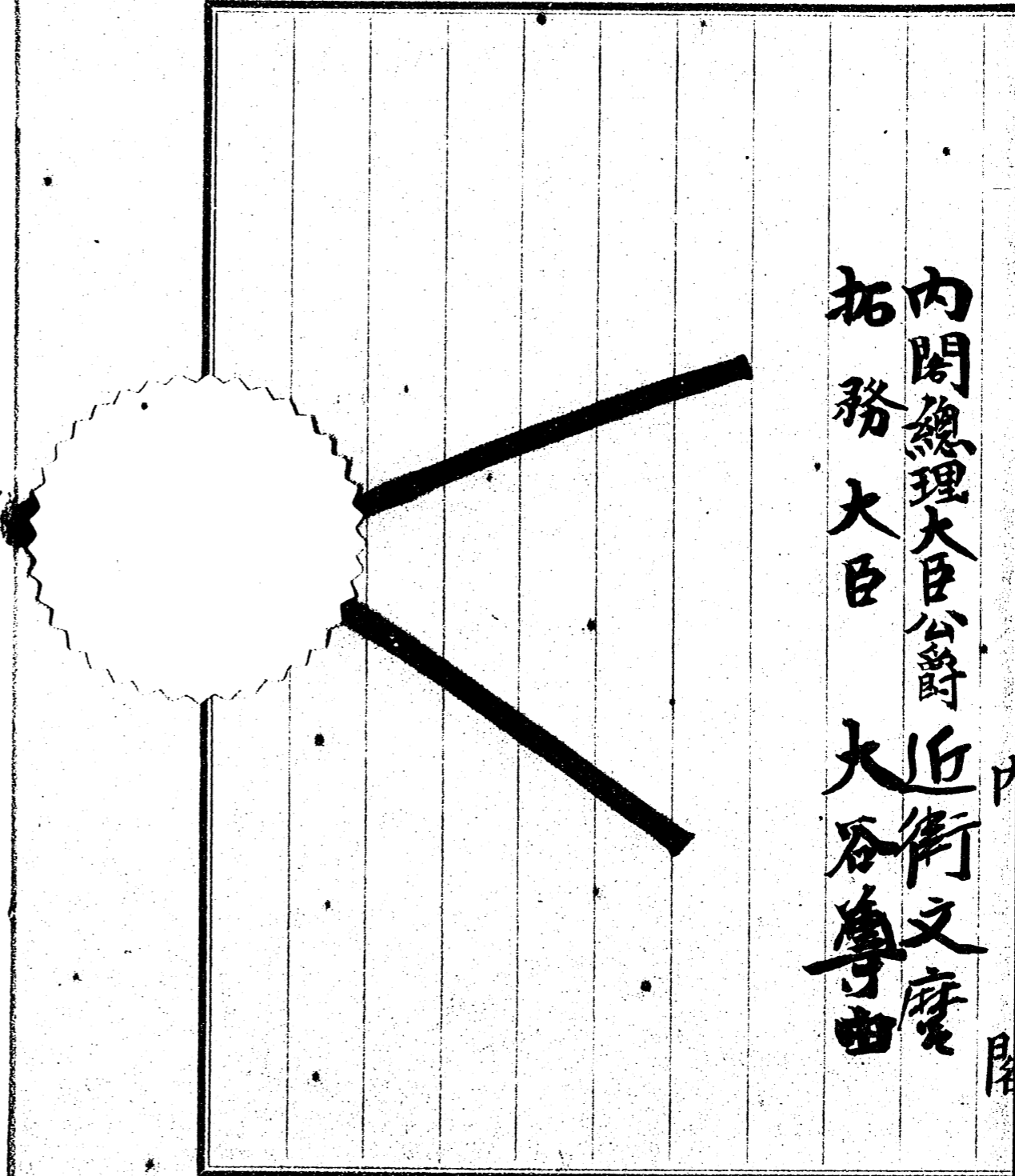


昭和十三年三月三十一日

月

日

内閣總理大臣公爵近衛文麿
拓務大臣 大谷篤由



勅令第二百二十一號

南洋群島所得稅令

- 第一條 南洋群島ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル者ハ本令ニ依リ所得稅ヲ納ムル義務アルモノトス
- 第二條 前條ノ規定ニ該當セザル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ所得ニ付テノミ所得稅ヲ納ムル義務アルモノトス
- 一 南洋群島ニ資産又ハ營業ヲ有スルトキ
 - 二 南洋群島ニ於テ公債、社債又ハ南洋拓殖株式會社預金ノ利子ノ支拂ヲ受クルトキ
 - 三 南洋群島ニ本店ヲ有スル法人ヨリ利益若ハ利息ノ配當又ハ利益ノ處分タル賞與若ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與ヲ受クルト

四 南洋群島ニ於テ一時恩給又ハ之ニ類スル退職給與ノ支拂ヲ受クルトキ

第三條 所得税ハ左ノ所得ニ付之ヲ賦課ス但シ貯蓄債券又ハ復興貯蓄債券ノ利子ニハ之ヲ課セズ

第一種

- 甲 法人ノ普通所得
- 乙 法人ノ超過所得
- 丙 法人ノ清算所得

第二種

甲 南洋群島ニ於テ支拂ヲ受クル公債、社債又ハ南洋拓殖株

式會社預金ノ利子

乙 第一條ノ規定ニ該當セザル者ノ南洋群島ニ本店ヲ有スル

法人ヨリ受クル利益若ハ利息ノ配當又ハ利益ノ處分タル賞與若ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與

丙 南洋群島ニ於テ支拂ヲ受クル一時恩給又ハ之ニ類スル給與

第三種

第二種ニ屬セザル個人ノ所得

第四條 法人ノ普通所得ハ各事業年度ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタル金額ニ依ル

法人ガ國債ヲ所有スル場合ニ於テハ國債ノ利子額中其ノ國債ヲ

南洋羣島ノ普通所得ノ控除

所有シタル期間ノ利子額百分ノ七十ニ相當スル金額ヲ申請ニ依リ其ノ普通所得ヨリ控除ス

第二條ノ規定ニ依リ納稅義務アル法人ノ普通所得ハ南洋羣島ニ於ケル資産又ハ營業ニ付前二項ノ規定ニ準ジ之ヲ計算ス

法人ガ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ因リテ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ一事業年度ト看做ス

第五條 法人ノ普通所得ガ當該事業年度ノ資本金額ニ對シ年百分ノ十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ヲ以テ法人ノ超過所得トス

第六條 法人ノ各事業年度ノ資本金額ハ各月末ニ於ケル拂込株式

金額又ハ出資金額及積立金額ノ月割平均ヲ以テ之ヲ計算ス

第七條 第二條ノ規定ニ依リ納稅義務アル法人又ハ所得稅ヲ課スベキ所得ト其ノ他ノ所得（第四條第二項ノ控除額ヲ含ム）トヲ有スル法人ノ各事業年度ノ資本金額ハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ之ヲ計算ス

第八條 本令ニ於テ積立金トハ積立金其ノ他名義ノ何タルヲ問ハズ法人ノ普通所得中其ノ留保シタルモノヲ謂フ

第九條 法人解散シタル場合ニ於テ其ノ殘餘財産ノ價額ガ解散當時ノ拂込株式金額又ハ出資金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ヲ以テ法人ノ清算所得トス

法人合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ

株主又ハ社員ガ合併後存続スル法人若ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ヨリ合併ニ因リテ取得スル株式ノ拂込済金額又ハ出資金額及金錢ノ總額ガ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ合併當時ノ拂込株式金額又ハ出資金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ハ之ヲ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ清算所得ト看做ス

第四條 第二項ノ規定ハ法人ノ清算所得ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第十條 合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ所得ニ付所得税ヲ納ムル義務アルモノトス

第十一條 所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店ヲ有スル法人ガ所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州、樺太又

ハ南洋群島ニ本店ヲ有スル法人ト合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ガ南洋群島ニ本店ヲ有スルトキハ前條ノ規定ヲ準用ス

第十二條 第二種ノ所得ハ其ノ支拂ヲ受クベキ金額ニ依ル但シ一時恩給又ハ之ニ類スル退職給與ハ其ノ支拂ヲ受クベキ金額ヨリ五千圓ヲ控除シタル金額ニ依ル

第十三條 第三種ノ所得ハ左ノ各號ノ規定ニ依リ之ヲ算出ス

- 一 營業ニ非ザル貸金ノ利子並ニ第二種ノ所得ニ屬セザル公債、社債及預金ノ利子ハ前年中ノ収入金額
- 二 第二種ノ所得ニ屬セザル一時恩給及之ニ類スル退職給與ハ前年中ノ収入金額ヨリ支拂者ヲ異ニスル毎ニ五千圓ヲ控除シ

タル金額

タル金額

三 山林ノ所得ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額
四 賞與又ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與ハ前年三月一日ヨリ其ノ年二月末日迄ノ收入金額

五 法人ヨリ受クル利益若ハ利息ノ配當又ハ剩餘金ノ分配ハ前年三月一日ヨリ其ノ年二月末日迄ノ收入金額（無記名株式ノ配當ニ付テハ支拂ヲ受ケタル金額）ヨリ其ノ十分ノ二ヲ控除シタル金額

六 俸給、給料、歳費、年金（郵便年金ヲ除ク）、恩給（一時恩給ヲ除ク）及此等ノ性質ヲ有スル給與ハ前年中ノ收入金額

但シ前年一月一日ヨリ引續キ支給ヲ受ケタルニ非ザルモノニ付テハ其ノ年ノ豫算年額

七 前各號以外ノ所得ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額但シ前年一月一日ヨリ引續キ有シタルニ非ザル資産、營業又ハ職業ノ所得ニ付テハ其ノ年ノ豫算年額

株式ノ消却ニ因リ支拂ヲ受クル金額又ハ退社ニ因リ持分ノ拂戻トシテ受クル金額ガ其ノ株式ノ拂込濟金額又ハ出資金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ハ之ヲ法人ヨリ受クル利益ノ配當ト看做ス

第一項第一號、第三號及第五號ノ所得ニ付テハ被相続人ノ所得ハ之ヲ相續人ノ所得ト看做シ第七號ノ所得ニ付テハ相續シタル

日本經濟學會 近世經濟學 卷之五

資産又ハ營業ハ相續人ガ引續キ之ヲ有シタルモノト看做シテ其ノ所得ヲ計算ス

第十四條 前條ノ規定ニ依リ算出シタル所得總額一萬八千圓以下ナルトキハ其ノ所得中勤勞所得（前條第一項第三號及第五號ノ所得）ニ付左ノ金額ヲ控除ス

一 所得總額九千圓以下ナルトキハ勤勞所得ノ十分ノ二
二 所得總額中勤勞所得以外ノ所得九千圓以上ナルトキハ勤勞所得ノ十分ノ一

三 所得總額九千圓ヲ超エ勤勞所得以外ノ所得九千圓未滿ナルトキハ勤勞所得中勤勞所得以外ノ所得ト合算シテ九千圓ニ達スル迄ノ金額ノ十分ノ二、其ノ他ノ金額ノ十分ノ一

戸主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ付前項ノ規定ヲ適用ス戸主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得ニ付亦同ジ

第十五條 前二條ノ規定ニ依リ算出シタル所得總額三千圓以下ナルトキハ其ノ所得ヲ有スル者ノ申請ニ依リ其ノ所得ヨリ其ノ年三月一日現在ノ同居ノ戸主及家族中年齡十八歲未滿若ハ六十歲以上ノ者又ハ不具癡疾者一人ニ付百圓ヲ控除ス但シ第二條ノ規定ニ依ル納稅義務者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

戸主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ付前項ノ規定ヲ適用ス戸主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得ニ付亦同ジ

南洋廳長官ノ指定スルモノ

前項ノ場合ニ於テ控除スベキ金額ハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ納稅義務者ノ一人又ハ數人ノ所得ヨリ之ヲ控除ス
同一人ノ所得ニ付前三項ノ規定ニ依ル控除ヲ爲ス場合ニ於テハ先ヅ第十三條第一項第二號及第三號ノ所得以外ノ所得ニ付之ヲ爲シ不足アルトキハ順次同項第三號及第二號ノ所得ニ及ブ
第一項ノ不具癡疾者ハ南洋廳長官之ヲ定ム

第十六條 自己、戸主若ハ家族又ハ其ノ相續人ヲ保險金受取人トスル生命保險契約ノ爲ニ拂込ミタル保險料ハ年額二百圓ヲ限り南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ本人ノ申請ニ依リ其ノ所得ヨリ之ヲ控除ス但シ第二條ノ規定ニ依ル納稅義務者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第十七條 左ニ掲グル者ニハ所得稅ヲ課セズ

一 南洋廳長官ノ指定スル公共團體

二 南洋群島裁判事務取扱令ニ於テ依ルコトヲ定メタル民法第三

十四條ノ規定ニ依リ設立シタル法人其ノ他之ニ類スルモノ

ニシテ南洋廳長官ノ指定スルモノ

第十八條 所得稅法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ノ第一種甲及乙並ニ第二種乙ノ所得ニ付テハ所得稅ヲ課セズ

第十九條 所得稅法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ住所又ハ一年以上居所ヲ有スル個人ノ第二種乙ノ所得ニ付テハ所得稅ヲ課セズ

所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州若ハ樺太ニ住所ヲ有スル個人又ハ南洋群島ニ住所ヲ有セズシテ所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州若ハ樺太ニ一年以上居所ヲ有スル個人ノ第三種ノ所得ニ付テハ左ニ掲グル場合ヲ除クノ外所得税ヲ課セズ

一 南洋群島ニ住所ヲ有スル者所得金額決定後所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ住所ヲ移轉シタルトキ

二 所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ住所ヲ有スル者所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依ル所得金額決定前南洋群島ニ住所ヲ移轉シタルトキ

三 南洋群島、所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太

ニ住所又ハ一年以上居所ヲ有スル者ノ住所又ハ居所ニ付前二號ニ準ズベキ事由ノ生ジタルトキ

第二十條 第三種ノ所得ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニハ所得税ヲ課セズ

- 一 軍人從軍中ノ俸給及手當
- 二 扶助料及傷痍疾病者ノ恩給
- 三 旅費、學資金及法定扶養料
- 四 郵便貯金、産業組合貯金及銀行貯蓄預金ノ利子
- 五 第十三條第一項第七號ノ所得中營利ノ事業ニ屬セザル一時ノ所得
- 六 所得税法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於ケル法

南洋群島ノ所得ニ付同様に免稅ヲ爲サザル場合ニ於テハ

令ニ依リ第二種ノ所得トシテ所得稅ヲ課スル所得

七 日本ノ國籍ヲ有セザル者ノ南洋群島、所得稅法施行地、朝鮮、臺灣、關東州及樺太外ニ於ケル資産、營業又ハ職業ヨリ生ズル所得

第二十一條 南洋廳長官ノ指定スル重要物産ノ製造業ヲ營ム者ニハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ開業ノ年及其ノ翌年ヨリ三年間其ノ業務ヨリ生ズル所得ニ付所得稅ヲ免除ス
前項ノ規定ニ依リ所得稅ノ免除ヲ受クル重要物産ノ製造業ノ承繼又ハ其ノ承繼ト認ムベキ事實アリタル場合ニ於テ其ノ業務ニ付所得稅ヲ免除スル期間殘存スルトキハ現營業者ハ其ノ殘存期間ヲ承繼ス

第二十二條 所得稅法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於テ所得稅ヲ免除スル各當該地ノ製造業ヨリ生ズル所得ニ付テハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ所得稅ヲ免除ス

第二十三條 南洋群島ニ住所ヲ有セザル外國人又ハ外國法人ニハ外國ノ船籍ヲ有スル船舶ノ所得ニ付所得稅ヲ免除ス但シ其ノ船籍國ガ日本船舶ノ所得ニ付同様ノ免稅ヲ爲サザル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第二十四條 第三種ノ所得ハ千五百圓ニ滿タザルトキハ所得稅ヲ課セズ第十四條乃至第十六條ノ規定ニ依ル控除ヲ爲シタル爲千五百圓ニ滿タザルニ至リタルトキ亦同ジ
戸主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ付前項ノ規

内
内
内
内

定ヲ適用ス戸主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得ニ付亦同

ジ

第二十五條 第一種ノ所得ニ對スル所得税ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ

賦課ス

甲 普通所得

南洋群島ニ本店ヲ有スル法人 百分ノ六

南洋群島ニ本店ヲ有セザル法人 百分ノ九

乙 超過所得

超過所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各稅率ヲ適用ス

普通所得金額中資本金額ニ對シ年百分ノ十ノ割合ヲ以テ算

出シタル金額ヲ超ユル金額 百分ノ四

同百分ノ二十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額 百分ノ十

同百分ノ三十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額 百分ノ二十

丙 清算所得

清算所得金額ヲ左ノ如ク區分シ各稅率ヲ適用ス

積立金又ハ本令ニ依リ所得税ヲ課セラレザル所得ヨリ成ル

金額 百分ノ三

其ノ他ノ金額 百分ノ九

法人ガ各事業年度ニ於テ納付シタル第二種ノ所得ニ對スル所得
稅額ハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ當該事業年度ノ第一種ノ所

日本銀行
内務省
關

得ニ對スル所得稅額ヨリ之ヲ控除ス

前項ノ場合ニ於テ控除スベキ第二種ノ所得ニ對スル所得稅ハ第一種ノ所得計算上之ヲ損金ニ算入セズ

前二項ノ規定ハ法人ノ清算所得ニ對スル所得稅ニ付之ヲ準用ス
前三項ノ規定ハ法人ノ所得稅法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ノ法令ニ依リ納付シタル第二種ノ所得ニ對スル所得稅額ニ付之ヲ準用ス

第二十六條 同族會社ガ各事業年度ニ於テ留保シタル金額中左ノ各號ノ一ニ該當スル金額アルトキハ政府ハ其ノ事業年度ノ普通所得ヲ年額ニ換算シタル金額中五萬圓以下ノ金額ニ百分ノ六、五萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ十、十萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ

十五、五十萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ二十、百萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ二十五ヲ乘ジタル合計金額ノ普通所得年額ニ對スル割合ヲ求メ之ヲ稅率トシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル金額（各號共ニ該當スル場合ニハ其ノ多額ナル一方）ニ付適用シテ算出シタル稅額ヲ普通所得ニ對スル所得稅ニ加算スルコトヲ得

一 事業年度ノ普通所得中留保シタル金額ガ其ノ事業年度ニ於ケル普通所得ノ十分ノ三ニ相當スル金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額

二 事業年度末ニ於ケル積立金及其ノ事業年度ノ普通所得中留保シタル金額ノ合計ガ其ノ事業年度末ニ於ケル拂込株式金額又ハ出資金額ノ二分ノ一ニ相當スル金額ヲ超過スルトキハ其

ノ超過金額但シ其ノ事業年度末ニ於ケル積立金ガ拂込株式金額又ハ出資金額ノ二分ノ一ヲ超過スル場合ニ於テハ其ノ超過額ハ之ヲ控除ス

前項ノ普通所得又ハ留保シタル金額ハ本令ニ依リ所得税ヲ課セラレザル所得（第四條第二項ノ控除額ヲ含ム）又ハ繰越缺損金ノ補填ニ充當セラレタル金額ヲ控除セズシテ之ヲ計算ス
本令ニ於テ同族會社トハ株主又ハ社員ノ一人及之ト親族、使用人等特殊ノ關係アル者ノ株式金額又ハ出資金額ノ合計ガ其ノ法人ノ株式金額又ハ出資金額ノ二分ノ一以上ニ相當スル法人ヲ謂フ

第二十七條 第二種ノ所得ニ對スル所得税ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ

賦課ス

甲 國債ノ利子 百分ノ一

國債以外ノ公債ノ利子 百分ノ二

其ノ他 百分ノ三

乙 百分ノ五

丙 所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各稅率ヲ適用ス

二萬圓以下ノ金額 百分ノ三

二萬圓ヲ超ユル金額 百分ノ六

十萬圓ヲ超ユル金額 百分ノ十四

五十萬圓ヲ超ユル金額 百分ノ二十

第二十八條 第三種ノ所得ニ對スル所得税ハ所得金額ヲ左ノ各級

ニ區分シ遞次ニ各稅率ヲ適用シテ之ヲ賦課ス但シ第十三條第一
 項第二號及第三號ノ所得ハ其ノ他ノ所得ト之ヲ區分シ同項第二
 號ノ所得ニ付テハ支拂者ヲ異ニスル金額毎ニ前條内ノ稅率ヲ適
 用シテ算出シタル金額ヲ以テ其ノ稅額トシ第十三條第一項第三
 號ノ所得ニ付テハ其ノ所得ヲ五分シタル金額ニ對シ本項ノ稅率
 ヲ適用シテ算出シタル金額ヲ五倍シタルモノヲ以テ其ノ稅額ト
 ス

千五百圓以下ノ金額	百分ノ〇・五
千五百圓ヲ超ユル金額	百分ノ一
二千圓ヲ超ユル金額	百分ノ一・五
三千圓ヲ超ユル金額	百分ノ二・五

五千圓ヲ超ユル金額	百分ノ三・五
七千圓ヲ超ユル金額	百分ノ四・五
一萬圓ヲ超ユル金額	百分ノ五・五
一萬五千圓ヲ超ユル金額	百分ノ六・五
二萬圓ヲ超ユル金額	百分ノ八
三萬圓ヲ超ユル金額	百分ノ九・五
五萬圓ヲ超ユル金額	百分ノ十一
七萬圓ヲ超ユル金額	百分ノ十三
十萬圓ヲ超ユル金額	百分ノ十五
二十萬圓ヲ超ユル金額	百分ノ十七
五十萬圓ヲ超ユル金額	百分ノ十九

百萬圓ヲ超ユル金額

百分ノ二十一

二百萬圓ヲ超ユル金額

百分ノ二十三

三百萬圓ヲ超ユル金額

百分ノ二十五

四百萬圓ヲ超ユル金額

百分ノ二十七

前項ノ場合ニ於テ第十三條第一項第二號ノ所得ヲ除クノ外戸主及其ノ同居家族ノ所得金額ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ對シ稅率ヲ適用シテ算出シタル金額ヲ各其ノ所得金額ニ案分シテ各其ノ稅額ヲ定ム戸主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得金額ニ付亦同ジ

第二十九條 第一種ノ所得ニ付納稅義務アル法人ハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ財產目錄、貸借對照表、損益計算書又ハ清算若

ハ合併ニ關スル計算書並ニ第四條乃至第九條ノ規定ニ依リ計算シタル所得及資本金額ノ明細書ヲ添附シ其ノ所得ヲ政府ニ申告スベシ但シ南洋群島ニ本店ヲ有セザル法人ハ南洋群島ニ於ケル資産又ハ營業ニ關スル損益ヲ計算シタル所得及資本金額ノ明細書ヲ添附スベシ

前項ノ規定ハ第一種ノ所得ニ付所得稅ヲ課セラルベキ法人ニ付其ノ所得ナキ場合ニ之ヲ準用ス

第四條第二項ノ規定ニ依ル控除ヲ受ケントスル者ハ第一項ノ申告ト同時ニ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ其ノ申請書ヲ提出スベシ

第三十條 第三種ノ所得ニ付納稅義務アル者ハ南洋廳長官ノ定ム

ル所ニ依リ毎年三月三十一日ニ所得ノ種類及金額ヲ詳記シ政府ニ申告スベシ

第十五條又ハ第十六條ノ規定ニ依ル控除ヲ受ケントスル者ハ前項ノ申告ト同時ニ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ其ノ申請書ヲ提出スベシ

第三十一條 第一種ノ所得金額ハ第二十九條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定シ第三種ノ所得金額ハ所得調査委員會ニ諮問シ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得調査委員會閉會後第三種ノ所得ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲スベカリシ年ノ翌年以後ニ於ケ

ル所得調査委員會ニ諮問シ政府ニ於テ其ノ所得金額ヲ決定スルコトヲ得

所得調査委員會閉會後第三種ノ所得ヲ有スル者納稅義務アルコトヲ申出デ又ハ納稅義務者所得金額ノ増加アルコトヲ申出デタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラズ政府ニ於テ其ノ所得金額ヲ決定ス

第三十二條 各支廳所轄内ニ所得調査委員會ヲ置ク
調査委員ノ定數ハ南洋廳長官之ヲ定ム

第三十三條 調査委員ハ所得調査委員會ノ屬スル区域内ニ居住シ前年第三種ノ所得稅ヲ納メ其ノ年第三十條第一項ノ申告ヲ爲シタル者ニ就キ支廳長之ヲ命ズ

前項ノ場合ニ於テ被相続人ノ爲シタル納税又ハ申告ハ其ノ相続人ノ納税又ハ申告ト看做ス

調査委員ノ任期ハ四年トス但シ補缺ノ調査委員ノ任期ハ前任者ノ残任期間トス

第三十四條 調査委員左ノ各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキハ其ノ職ヲ失フ

一 第三種ノ所得ニ付納税義務ヲ有セザルニ至リタルトキ

二 所得調査委員會ノ屬スル区域内ニ居住セザルニ至リタルト

キ

調査委員職務ヲ怠リ又ハ體面ヲ汚損スル行爲アリタルトキハ支廳長ハ之ヲ解任スルコトヲ得

第三十五條 所得調査委員會ノ議事ニ關スル事項ハ南洋廳長官之ヲ定ム

第三十六條 五月三十一日迄ニ所得調査委員會成立セザルトキ又ハ諮問事項ヲ議了セザルトキハ政府ハ直ニ所得金額ヲ決定ス

第三十七條 調査委員ニハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ手當及旅費ヲ給ス

第三十八條 南洋群島ニ於テ利子支拂ヲ爲スベキ公債又ハ社債ヲ募集シタル者ハ遲滞ナク其ノ公債又ハ社債ニ付左ノ事項ヲ記載シタル調書ヲ政府ニ提出スベシ

一 公債又ハ社債ノ名稱及其ノ總額

二 利子支拂期限及利率

三 償還ノ方法及期限

四 數回ニ分チテ拂込ヲ爲サシムルトキハ其ノ拂込ノ金額及時
期

第三十九條 第三種ノ所得ニ屬スル俸給、給料、歳費、年金、恩
給、賞與若ハ此等ノ性質ヲ有スル給與ノ支拂ヲ爲ス者又ハ利益
若ハ利息ノ配當ヲ爲ス法人ハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ支拂
調書ヲ政府ニ提出スベシ

前項ノ支拂調書ヲ提出シタル者ニ對シテハ南洋廳長官ノ定ムル
金額ヲ交付スルコトヲ得

第四十條 當該官吏ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者、納稅義

務アリト認ムル者又ハ前條第一項ノ支拂調書ヲ提出スル義務ア
ル者ニ質問シ又ハ其ノ所得若ハ支拂ニ關スル帳簿物件ヲ檢査ス
ルコトヲ得

第四十一條 當該官吏ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者又ハ納
稅義務アリト認ムル者ニ金錢又ハ物品ヲ支拂フベキ義務ヲ有ス
ト認ムル者ニ對シ其ノ金額、數量、價格又ハ支拂期日ニ付質問
スルコトヲ得

第四十二條 第三十一條若ハ第三十六條ノ規定ニ依リ第一種若ハ
第三種ノ所得金額ヲ決定シタルトキ又ハ第二十六條ノ規定ニ依
リ稅額ヲ加算シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

南洋群島ニ住所及居所又ハ營業所ヲ有セザル納稅義務者納稅管理人ノ申告ヲ爲サザルトキハ前項ノ通知ハ公告ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ公告ノ初日ヨリ七日ヲ經過シタルトキハ其ノ通知アリタルモノト看做ス

第四十三條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル所得金額又ハ加算稅額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ三十日內ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ請求アリタル場合ト雖モ政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セズ

第四十四條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得審査委員會ニ

諮問シ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得審査委員會ハ前條第一項ノ請求ヲ爲シタル者ニ對シ其ノ所得ニ關スル事實ヲ質問スルコトヲ得

第四十五條 所得審査委員會ハ南洋廳ニ之ヲ置ク

所得審査委員會ハ會長及審査委員六人ヲ以テ之ヲ組織ス

會長ハ南洋廳高等官中ヨリ南洋廳長官之ヲ命ズ

審査委員ハ南洋廳高等官中ヨリ三人、調査委員中ヨリ三人ヲ南洋廳長官ニ於テ命ズ

所得審査委員會ノ議事ニ關スル事項ハ南洋廳長官之ヲ定ム

第四十六條 調査委員中ヨリ命ゼラレタル審査委員ニハ南洋廳長

官ノ定ムル所ニ依リ日當及旅費ヲ給ス

第四十七條 第三種ノ所得ニ付納稅義務アル者第十三條第一項第六號及第七號ノ所得金額二分ノ一以上ヲ減損シタルトキハ政府ニ所得金額ノ更訂ノ請求ヲ爲スコトヲ得但シ翌年一月三十一日ヲ過ギタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

所得金額決定後相續、贈與又ハ營業承繼ニ因リ所得金額ヲ減損シタル場合ニハ前項ノ規定ヲ適用セズ

第四十八條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ所得金額ヲ査覈シ二分ノ一以上ノ減損アルトキハ之ヲ更訂ス

第四十九條 第一種ノ所得ニ付テハ事業年度毎ニ所得稅ヲ徵收ス

但シ清算所得ニ付テハ清算又ハ合併ノ際之ヲ徵收ス

第二種ノ所得ニ付テハ其ノ金額支拂ノ際支拂者其ノ所得稅ヲ徵收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納ムベシ

第三種ノ所得ニ付テハ所得稅ノ年額ヲ二分シ左ノ二期ニ於テ之ヲ徵收ス但シ納稅義務者納稅管理人ノ申告ヲ爲サズシテ南洋群島外ニ住所又ハ居所ヲ移ストギハ直ニ其ノ所得稅ヲ徵收スルコトヲ得

第一期 其ノ年十月一日ヨリ三十一日限

第二期 翌年二月一日ヨリ末日限

土地ノ狀況ニ依リ必要アルトキハ政府ハ前項ノ納期ニ依ラズシテ税金ヲ徵收スルコトヲ得

第五十條 前條第二項ノ規定ニ依リ徵收スベキ所得稅ヲ徵收セザルトキ又ハ其ノ徵收シタル稅金ヲ納付セザルトキハ國稅徵收ノ例ニ依リ之ヲ支拂者ヨリ徵收ス

第五十一條 法人解散シタル場合ニ於テ清算所得ニ對スル所得稅又ハ前條ノ規定ニ依リ徵收セララルル稅金ヲ納付セズシテ、殘餘財産ヲ分配シタルトキハ其ノ稅金ニ付清算人連帶シテ納稅ノ義務アルモノトス

第五十二條 第四十七條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ更訂處分ノ確定スルニ至ル迄稅金ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

第五十三條 第三種ノ所得ニ付二以上ノ支廳所轄内ニ於テ所得金額ノ決定アリタルトキハ政府ハ納稅義務者ノ住所外以外、住所

ナキトキハ居所地以外ニ於ケル所得金額ノ決定ヲ取消スベシ

第五十四條 第一種及第三種ノ所得ニ對スル所得稅ハ納稅義務者ノ住所外、住所ナキトキハ居所地又ハ營業所ノ所在地ヲ以テ納稅地トス但シ住所外以外ニ在ル者ハ申告シテ居所地ニ於テ所得稅ヲ納ムルコトヲ得

第五十五條 南洋群島ニ住所及居所又ハ營業所ナキ者ハ納稅地ヲ定メ政府ニ申告スベシ申告ナキトキハ政府其ノ納稅地ヲ指定ス

第五十六條 納稅義務者納稅地ニ現住セザルトキ又ハ營業所ナキトキハ其ノ所得ノ申告、納稅其ノ他所得稅ニ關スル一切ノ事項ヲ處理セシムル爲納稅管理人ヲ定メ政府ニ申告スベシ南洋群島外ニ住所、居所又ハ營業所ヲ移サントスルトキ亦同ジ

第五十七條 同族會社ノ行爲又ハ計算ニシテ其ノ所得又ハ株主、社員若ハ之ト親族、使用人等特殊ノ關係アル者ノ所得ニ付所得、稅通脫ノ目的アリト認メラルモノアル場合ニ於テハ其ノ行爲又ハ計算ニ拘ラズ政府ハ其ノ認ムル所ニ依リ此等ノ者ノ所得金額ヲ計算スルコトヲ得

第五十八條 本令ハ島民ニハ之ヲ適用セズ

第五十九條 本令ニ定ムルモノノ外所得稅ニ關シ必要ナル規定ハ南洋廳長官之ヲ定ム

附 則

第六十條 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一種ノ所得稅ニ付テハ法人ノ本令施行ノ日以後終了スル事業

年度分所得稅ヨリ、第三種ノ所得稅ニ付テハ昭和十三年分ヨリ本令ヲ適用ス

第二種甲ノ所得ニシテ支拂期ノ本令施行前ニ屬スルモノ及第二種乙ノ所得ニシテ本令施行前ニ終了シタル法人ノ各事業年度ニ屬スルモノ竝ニ一時恩給又ハ之ニ類スル退職給與ニシテ本令施行前ノ退職ニ因ルモノニ付テハ本令ヲ適用セズ

第六十一條 昭和十三年分及同十四年分ノ第三種ノ所得中所得稅法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依リ本令施行ノ日ノ前日迄ニ第二種乙ノ所得トシテ所得稅ヲ課セラレタル所得アル場合ニ於テハ南洋廳長官ノ定ムル所ニ依リ其ノ所得ニ付納付シタル稅額ヲ第二十八條ノ規定ニ依リ計算シタル稅

額ヨリ控除シタル残額ヲ以テ其ノ年分ノ所得税額トス

第六十二條 昭和十三年分ノ第三種ノ所得ニ對スル所得税ニ限り
第十五條第一項中三月一日トアルハ五月一日、第三十條第一項
中三月三十一日トアルハ五月三十一日、第三十六條中五月三十
一日トアルハ七月三十一日トス

第六十三條 昭和十三年中ニ命ズベキ調査委員ハ所得調査委員會
ノ屬スル區域内ニ居住シ其ノ年第三十條第一項ノ規定ニ依ル申
告ヲ爲シタル者ニ就キ支廳長之ヲ命ズ
前項ノ規定ニ依リ命ゼラレタル調査委員ノ任期ハ昭和十七年三
月三十一日ヲ以テ終了ス

内
閣